令和6年度　函館大妻高等学校　学校評価＜第三者評価報告書＞

令和 6 年度の評価（第三者評価）は、**北海道教育大学教職大学院　特任教授　加賀重仁　氏**　に評価委員を委嘱して実施いたしました。以下、報告書を掲載いたします。

歴史ある函館大妻高等学校が、校訓である「恥を知れ」を踏まえ、一人一人の生徒がかけがえのない人生を切り拓く生きる力を育むとともに、より一層の豊かな社会の発展を目指し、職員一丸となって学校経営・学校運営に取り組んでいる。

令和６年度についても、適切に自己評価を実施するとともに、学校評議員会を中心に客観的に学校経営を評価し、充実した学校経営が継続できるよう外部から見た経営状況を真摯に受け止め、令和７年度の運営プランにつなげている。

1　学校経営ビジョンの共有

AI の進展など、これまでの人類の歩みが一層急激になっている昨今、校訓である「恥を知れ」は人間としての望ましい有り様を示したものであり、創立者の教育哲学、人間哲学が揺るぎないものであることを今でも示すとともに、有意な人材を数多く輩出してきた大妻高等学校のこれまでの伝統はとりわけ地域にとっても極めて大きな財産である。

一方で、その理念を踏まえた具体の教育活動は、今や社会の動向を見極めることに留まらず、「社会を創造する」視点が求められることから、教職員の経営参画意識の向上はこれまで以上に重要である。

経営ビジョンを共有する組織的な取組の工夫に努め、一人一人の教職員が主体性をもってビジョンの実現に向けて取り組むことができるよう努めていただきたい。

2　心理的安全性を担保した組織運営

大妻高等学校は、これまでその時代に応じて率先し有為な人材育成に努めてきた。それは元々「個業」の現場である学校において、管理職を先頭に、一人一人の教職員が教職の重さを自覚し、業務に邁進してきた証である。

学校関係者評価にもあるように、公立学校とは異なり、構成員が変わることが少ない私立学校においても「組織的の取り組むこと」の重要性を認識し、心理的安全性を担保した組織構造の工夫や一人一人の教職員のよさを生かす具体的な学校運営に努めていただきたい。

3　新しい教育を見据えた一人一台端末の導入

令和８年度の一人一台端末の導入を目指し、令和６年度には年３回の教職員研修を実施しており、中でも授業における効果的な活用など、具体的な内容についても研修を深めている。デジタルの進歩は極めて急激であり、学校教育においては教育活動における端末活用が急速に進められている。

端末活用に当たり、その目的を見失わず、生徒の可能性をいかんなく発揮させることができるよう取り組んでいただきたい。また、小中学校段階で使い慣れている入学生がほとんどであることから、同校種である高等学校や小中学校などの活用状況などからも学びながら準備に努めていただきたい。

4　生徒指導

大妻高等学校の校舎を拝見すると、目には見えない隅々から磨かれ、日常的に生徒が学校に愛着をもって清掃などにも取り組んでいることが見て取れる。また、その礼儀正しさは日常の教職員の丁寧な指導の賜物であるは一目瞭然である。

これからの社会を生きていくために、困難な状況にもひたむきに前を向き力強く取り組むとともに、豊かな創造性を発揮しその困難を乗り越えることが必要である。そうしたことから、生徒が自発的・主体的に成長する過程を支えることが必要であり、そうしたことから開発的な生徒指導の視点をもって、組織的に取り組む仕組みづくりに努めていただきたい。

5　進路指導

計画的に進められている進路指導の成果が、ほぼ１００％の進路決定という事実につながっている。大変丁寧に計画が練られ、１，２年生に対する適性検査、ガイダンスのほか、職業体験や職場見学、文章表現力を磨く学習などが適切に実施されている。

今後、少子高齢化が一層進み、社会全体の変革が求められる。そうした中、地域における大妻高等学校の存在意義は極めて大きいものがある。こうした変化の激しい社会に対応できるよう専門知識や技能の習得に留まらず、変革に対応できる、また自ら変革する社会を創り上げる人材の育成に資することができるよう、起業家教育の理念などを参考にするなど、キャリア教育の充実に努めていただきたい。

6　地域との連携

学校関係者評価にもあるように、大妻高等学校は地域に支えられ、地域とともに教育を進める極めて優れた学校である。一方で、地域事情もあり、卒業後地域を離れる生徒も多くいることは残念であるが、たとえば地域とのつながりを重視した教育活動はあくまで手段であり、こうした教育は人間教育として価値は極めて高いものがある。また、いずれ故郷で生きていく生徒、また異なる土地で生きていく生徒、両者にとって、今ある故郷で学ぶ数々の体験は人間としての深みを培うものであり、豊かな人間関係で結びつく社会の創造に欠くことはできないものである。ぜひ、継続していただきたい。

令和７年３月３１日

北海道教育大学教職大学院
特任教授　　加　賀　重　仁